令和５年度　成績概要書

課題コード（研究区分）：　4102-426500　（道受託研究）

１．研究課題名と成果の要約

１）研究成果名：令和５年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫

（研究課題名：病害虫発生予察調査）

２）キーワード：病害虫発生予察、注意すべき病害虫、新発生病害虫

３）成果の要約：令和５年度に実施した病害虫発生予察調査から、多発傾向にあった病害虫として 19 病害虫を示した。また、令和６年度に特に注意を要する病害虫として３病害虫について防除指導上の注意を喚起する。さらに、令和５年度に新たに発生を認めた病害虫として 17 病害虫（病害 10、害虫７）を示した。

２．研究機関名

１）代表機関・部・グループ・役職・担当者名：中央農業試験場・病虫部・予察診断グループ・研究主幹・西脇由恵

２）共同研究機関（協力機関）：

中央農業試験場・病虫部・病害虫グループ、上川農業試験場・研究部・生産技術グループ、
道南農業試験場・研究部・作物病虫グループ、十勝農業試験場・研究部・生産技術グループ、
北見農業試験場・研究部・生産技術グループ、花･野菜技術センター・研究部・生産技術グループ
北海道農政部技術普及課、北海道病害虫防除所（全道農業改良普及センター、北海道農業研究センター）

３．研究期間：令和５年度　（2023 年度）

４．研究概要

１）研究の背景

病害虫の発生はその年の発生状況や気象経過のほかに、前年の発生状況の影響を受ける。効率的な病害虫防除を実施するためにはそれらを踏まえた全道的な情報が求められる。また、道内で未確認の病害虫が突発的に発生するため、迅速な対応が求められる。

２）研究の目的

全道での病害虫発生状況を新発生病害虫も含めて記録し、これをもとに次年度に注意すべき病害虫を示して防除指導にあたっての注意を喚起する。

５．研究内容

１）農作物有害動植物の発生状況（R５年度）

・ねらい：農作物有害動植物の発生状況を記録する

・試験項目等：19 作物･89 病害虫の発生状況を調査

２）突発および新発生病害虫の診断試験および調査（R５年度）

・ねらい：道内で新たに発生した病害虫を同定し記録する

・試験項目等：発生調査、再現試験、同定試験

６．研究成果

１）農作物有害動植物の発生状況

本年の天候は春季から秋季まで高温に経過し、特に夏季の記録的な高温は病害虫の発生に大きく影響した。高温性の病害が多発し、害虫では早発や旺盛な増殖、加害活動が被害を拡大させた。

（１）令和５年に多発～やや多発した病害虫

ア）水稲：紋枯病
イ）秋まき小麦：赤さび病、眼紋病
ウ）春まき小麦：ムギキモグリバエ
エ）小豆：食葉性鱗翅目幼虫
オ）ばれいしょ：軟腐病、そうか病
カ）てんさい：褐斑病、ヨトウガ
キ）たまねぎ：軟腐病、タマネギバエ・タネバエ、ネギアザミウマ
ク）ねぎ：さび病、ネギアザミウマ
ケ）にんじん：黒葉枯病
コ）だいこん：軟腐病、キスジトビハムシ
サ）ブロッコリー：コナガ
シ）りんご：腐らん病

（２）令和６年度に特に注意を要する病害虫

（ア）トマトのトマトキバガ

本年、侵入警戒有害動植物であるトマトキバガの飛来が全道各地で確認された。８月下旬には施設栽培トマトで葉や果実に食害痕が発生し、被害が確認された。本種の発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター等に連絡する。発生を拡大させないため、薬剤散布を行うとともに、被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋没するなど適切に処分する。越冬ハウスでは残さやナス科雑草等の寄主植物を除去する。薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

（イ）小豆のマメノメイガ

本年、全道各地の小豆ほ場でノメイガ類による莢や花の食害が多発し、マメノメイガ幼虫が主体であることが確認された。本種は葉裏や莢等に産卵し、幼虫もこれらの部位を食害する。令和５年は小豆の播種時期が遅いほ場で被害が大きい事例が確認された。飛来性と考えられており、例年アズキノメイガの発生が少ない地域でも突発的に発生し世代を繰り返すため、被害拡大に注意が必要である。本年の発生状況から、当面の対策としては、播種は適期に実施し、ノメイガ類に登録のある農薬を用いて茎葉散布する。通常のアズキノメイガの防除時期に加えて開花始め及び９月以降の防除も有効と推察される。

（ウ）てんさいの褐斑病

本年は６月中旬以降の高温により初発時期が早まった。夏季を通して気温が高く、発生量が増加し、道内全域で被害が認められた。本年の多発により一次伝染源が多く存在するため、令和６年も早発・多発に注意する必要がある。耕種的な対策としては、連作を避け、可能な限り抵抗性の強い品種の導入が有効である。薬剤散布は遅くとも初発直後までに開始し、散布間隔が開きすぎないよう注意する。多数の薬剤で耐性菌の発生が確認されているため、マンゼブ剤を基幹とした防除を実施する。

２）突発および新発生病害虫の診断試験および調査

（１）新たに発生を認めた病害虫

ア）ほうれんそうのニセタマナヤガ（再同定による種訂正、新寄主）

（平成 20 年指導参考事項「平成 19 年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫」新たに発生を認めた病害虫「ほうれんそうのシロイチモジヨトウ」の訂正）

イ）こまつなの黒斑病（新称・国内新発生）

ウ）セルリーの萎縮炭疽病（新発生）

エ）セルリーの萎黄病(新発生)

オ）ねぎのシロイチモジヨトウ（新寄主）

カ）トマトのトマトキバガ（新発生）

キ）ミニトマトの茎えそ病（新発生）

ク）かぼちゃのホモプシス根腐病（新発生）

ケ）かんしょのタバココナジラミ・バイオタイプＱ（新発生）

コ）スターチスの萎凋細菌病(新発生)

サ）ダリアの根腐病（新称・国内新発生）

シ）しゃくやくの輪紋病（新発生）

ス）ヘーベの斑点病（新発生）

セ）ぶどうのチャバネアオカメムシ（新寄主）、ブチヒゲカメムシ（新寄主）

ソ）飼料用とうもろこしのシバツトガ（新発生）

タ）ホソバオケラの立枯病（新称・国内新発生）

〇再同定による種訂正：過去に報告した病害虫の種名に疑義が生じたため再同定し、種を訂正した

〇新寄主：道内に分布することが既知である害虫の、新たな作物への加害記録

〇新称：これまで正式な名称（病名、害虫の和名）のなかった新たな病害虫の名称提案

〇国内新発生：これまで国内での発生事例がなかった病害虫

〇新発生：道内での発生事例がなかった病害、道内に分布が確認されていなかった害虫

７．成果の活用策

１）成果の活用面と留意点

ここに記載した病害虫について、特に今後の発生動向に注意する。また、令和６年度に特に注意を要する病害虫については適切な防除対策を講じる。

２）残された問題とその対応　なし

８．研究成果の発表等　なし